

巻頭言

月惑星探査と地球観測の狭間で

現在私が所属している独立行政法人国立環境研究所(国環研)においては、月や惑星に関する研究はもちろん主業務ではありません。それでも縁あって今回「遊星人」の巻頭言を書かせていただくことになりました。

私自身の月惑星に関する研究は主にかぐやの光学センサであるLISMに関するものです。ただしかぐやに取り組み始めた当時は通商産業省配下の地質調査所(現在の産業技術総合研究所の一部)に所属し、地質リモートセンシングの1つとしてかぐやの研究に取り組んでいました。実際、当時の主業務は米国NASAの地球観測衛星Terra(1999年打上げ、現在でも運用中)に搭載されたASTERという資源探査用カメラのプロジェクトでした。

その後私は大学を経て国環研に異動し、現在は主に2017年度打ち上げ予定の温室効果ガス観測衛星GOSAT-2やハイパースペクトルセンサであるHISUI(打ち上げは2018年以降)の仕事をしています。

このように私はASTER(1990)→かぐや(1995)→GOSAT-2(2005)／HISUI(2006)(かっこ内はプロジェクトに参加した年.)と、地球観測と月惑星探査のプロジェクトに交互に携わってきたのですが、その過程で両分野の様々なinteractionを見ることが出来ました。例えば日米合同ASTERサイエンスチームの米国側メンバーにはVikingやMars Global Surveyorの機器PIやその教え子の皆さんがいました。彼らが地球観測と火星探査を同列に議論する姿を目の当たりにし、強く刺激を受けたことをよく覚えています。一方、かぐやのLISMは我が国の月惑星探査機搭載センサとしては最大級であったこともあり、その校正やデータ処理ではASTERを含む地球観測のノウハウと人材に助けられました。さらに最近では、かぐや等で育った人たちが地球観測ミッションでも活躍するようになりました。

その一方で両分野のプロジェクトの違いにも気づきました。例えば地球観測ではプロジェクト外のデータユーザを強く意識するのに対し、月惑星探査では科学者が自分の研究に必要なデータを取得することを目的とする面が強いこともその1つです。「社会貢献か科学者としての興味か」と言うと少々短絡的ですが、どちらも多額の税金が投入される以上、その立ち位置を常に意識すべきように思います。

私自身は当分GOSAT-2とHISUIにかかりきりになりますが、両分野のinteractionが双方に良い影響をもたらすよう、両分野の狭間の住人として今後も微力ながら努力していきたいと思います。

松永 恒雄(国立環境研究所)